

宮沢賢治と井伏鱒二

磯貝英夫

宮沢賢治と井伏鱒二は、わずかに二歳ちがいの（さらに正確には一歳半。年長は賢治）同世代文学者ですが、直接の接点は何もありません。賢治の前に鱒二が影をおとした気配はなく、賢治は、多分、その没年の三、四年前によりやく世に出た鱒二について知るところはなかったと推測されます。

長寿を保った井伏鱒二は、むろん賢治を知っていますが、書いたもので言くと、戦後の例の『黒い雨』（昭和41年）のなかの「閑間シゲ子手記」に、戦時の国定教科書中の「雨ニモマケズ」の詩句「一日玄米四合ト…」が「一日玄米三合ト…」と改訂されたことをとがめたある奥さんが、その筋の人に叱られた話が出てきます。さらにもう一つ、同時期のある小文（「初秋某日記」昭和40年）のなかで、信州の県民会館で、農村の人たちが多く集まった集会上にさそわれて出席したとき、何人かが、賢治のことを交えた話をしたり、賢治の詩を歌ったりしたのを聞いて、その感想を、「実際、宮沢賢治の詩は農村で働く人たちのなかに深く入つてゐる。つくづく私はさう思つた。」と述べています。

それだけです。共に、客観的記述をそれほど出るものではないと言つてよいでしょう。

さて、宮沢賢治と井伏鱒二を比較するとなると、生きた、資質、作風とも、異なるところが目立ちすぎるのですが、最も大きな文脈で眺めると、注目すべき、基本的な共通点が浮上します。すなわち、両者共に、《故郷》に深く根ざすことによって文学的生命を獲得した文学者であつたということですから、これは一見単純なことのようにですが、私は、このありようを、以前から文学

史的な事件とする思いを持つてきました。そこで、しばらく話を拡大することを許してください。

小林秀雄は、宮沢賢治の没年昭和八年に、「故郷を失つた文学」という評論『文芸春秋』5月）を発表しています。東京生まれの自分という存在を率直に省みて、われながら合点のゆかぬ奇怪な存在であるとし、故郷がない、具体性がない、足を地につけた社会人の面貌を持たないなどと列挙して、そういう「抽象人」の同類の作る今の文学は「青春を失つた青年の文学だ」などと切り込んだ評論です。当時の小林は、西洋の諸観念を追つて浮遊する同時代文学の最も手きびしい指揮者として頭角を現わしてきただけですが、この評論は、ほかならぬ自分自身を軸として、その不安や焦燥を、故郷喪失という基本概念にしぼつて対象化した実感的な論として、注目されるものです。ここから、「私小説論」（昭和10年）における有名な「社会化した私」というテーマに到着するのは、あと一歩です。

ついでにもう一例。少し飛んで戦後になるのですが、伊藤整が、ほぼ同じ文学状況に対して、「逃亡奴隷」というかなりどぎついことを投げつけます（「逃亡奴隷と仮面紳士」昭和23年）。自由のない遅れた故郷＝現世のくびきを断つて逃亡した奴隷の集まつた共同体が日本の文壇ということになるわけです。小林の「故郷を失つた文学」は、伊藤整ふうには、「逃亡奴隷の文学」といったことになります。そして、このことばも、決して、他人事の総括概念ではなく、窮乏した父Ⅱ家を見捨てて上京した伊藤整自身の負い目による屈折した感情をつつんだ、それゆえの手きびしい命名であつたのです。

ニュアンスは当然ちがうのですが、昭和期の最もすぐれた、出自のちがう

二人の批評的自意識がつかんだこの相似的認識は重要で、言われてみれば、日本近代文学の主傾向はまさしくそういうものとしてあつたと合点されます。そのうえで、今日の主題である宮沢賢治、井伏鱒二とたどつてくると、いづれも、いま示した概括のなかに収まらないことに、いやでも気づかれます。となると、二人とも、日本近代文学史上の異例の存在ということになります。

父との葛藤——離脱という見慣れた光景ものぞかせながら、結局は、故郷と共に生きる異例の道を選んだ宮沢賢治については、もう多くを言う必要はないでしょう。一般文士とまったく変わらない道を歩いた井伏鱒二については、すこし立ち入らなければなりません。

井伏鱒二がその真面目を発揮するのは、故郷ものⅡ在所ものからと言つてよいのですが、その作品の独自性を最初に認めて絶賛したのが小林秀雄であつたことも興味ぶかいことです（井伏鱒二の作品について「昭和6年」。これは、「丹下氏邸」発表（昭和6年）の直後に書かれた新聞紙上の批評文で、井伏に悪作Ⅱ失敗作があることも正当に指摘しながら、在所ものの頂点としての「丹下氏邸」について、「構造は最も完璧」で、その文章の「一字も彼の心から逸脱してをりません」と言い切っています。

ところで、当時の文壇といえは、井伏がつむぎ出した風変わりな文学世界を理解しあぐねていたというのが正直なところで、その結果として「ナンセンス文学」という「定説」の網をかぶせて片づけようとしていました。小林の批評文は、そういう「定説」なるものに強く反発したのもであつたのです。

当時の文壇潮流を大まかに言えば、私小説中心の守旧派のほかに、圧倒的なプロレタリア文学系流、それに対抗する芸術派Ⅱモダニズム系流の諸派が、新しい意匠を競っていました。そして、井伏鱒二が、笑いを軸とするふしぎな新文体によつて在所の諸光景をつむぎだした時、人々は、それを、モダニズム系流の一先端としてのナンセンス文学の変種として納得しようとしたのです。ところが、鋭い感受性を持つ小林秀雄は、そこに、そんな表層的時流

とは何の関係もないたしかな個の手応えを感じとつたのです。

ここで井伏本人の言い分を聞くと、彼は、創元社『川と谷間』（昭和14年）の「序」のなかで、農民文学のつもりはないとくりかえしつつ、これは、「私の土俗趣味に根底を置く」、「私の空想による田園を現はした一種の風物誌」だと、簡単に言つてのけています。言いかえれば、井伏はここで、自分の（内なる故郷）に降り立ったと言つてもよいでしょう。そして、そこに出現した〈故郷〉は、明治以来続いてきている、感傷的な田園文学や、自然主義系の農村文学、社会派系流の農民文学等のどれともちがった面貌のものでした。あるいは、そのどれをも含みつつ、ちがった面貌を持つものとして現われたと言いなおしてもよいかもしれません。時代の潮流を重視する人々がとまどつたのはそのせいです。

そこで、作者井伏鱒二その人の成長の過程を改めて見直してみると、興味ぶかいことに気づきます。それは、日本の近代文士に最も普遍的な家郷との葛藤、悶着の痕跡がほとんど見られないということです。告白をきらう井伏が書かなかつたことを無いと言ふのには慎重でなければなりません、それは対照的に、上京した井伏が、東京——その知識人たちの動きなどの間に感じた異和感は、あのとぼけた筆の間からこぼれ落ちて、かなりよく伝わってくるのです。たとえば、同人雑誌の仲間が全部左傾したが、自分は氣無精で左傾できなかったというような言いかた——。

結局井伏は、すべて内面の話ですが、なじみにくい東京から脱出して内なる故郷に帰り、そこでようやく、水を得た魚になったのです。これは、出郷——近代的自我の樹立へ、といった方向性で概括されやすい一般文士たちのコースとは逆のコースになります。

といつても、以後井伏が、在所ものだけにこだわらずつづけたわけでは決してありません。そこである安定を得た井伏は、在所の人々ともほぼ同質の都市小庶民の世界や、さかのぼつては〈まげもの〉の世界へも、自在に素材を拡げてゆきます。しかし、その姿勢は、戦中・戦後の急流のなかでも一貫して変わらず、やがて巨大な存在感を示すようになることについては、もうあれこれ言う必要はないと思います。

ついでに、生活上のことをつけ加えれば、井伏は、上京して、やがて定着した荻窪に第二の《故郷》を構築したとも言えそうです。『荻窪風土記』（昭和57年）を読んでいると、どうもそういう気がしてきます。伊藤整が逃亡奴隷の典型の一人とする太宰治が、あそこまで荻窪を頼ったのも、そこが、自由な、いわば進化した故郷にほかならなかったからだと言つてよいのではないのでしょうか。荻窪亭主人は、決して人を決めつけることはありません。そこは、繊細な太宰にとって最も心休まる場所であつたと思われまふ。しかし、井伏は、基本的に太宰の家郷の人々と同質の存在であり、晩年の太宰の、例の遺書にほめかされて、井伏に対する心理的葛藤は、その意味で、ほとんど手に取るようによくわかります。

ここで、井伏の特に初期の在所ものの特色について、若干のことをまとめてみたいと思います。第一は、その在所が、井伏が独自に開発した諧謔文体によつてあざやかに打ち出されたということ。この新文体は、対文壇戦略としてあみだされた側面もあるのですが、生活共同体（この場合は農村）が醸成させてきた羞恥心を根底とし、それをカバーする技法として、リアリティを持つていました。ご承知のとおり、昭和期は、一般にも、新感覺派をはじめとして、表現レベルの新技巧が競われた時代でもあつたのですが、そのほとんどが時の淘汰に堪えなかつたなかで、井伏のこの飄逸な新技法は、いまでも基本的に色あせていないことに注意してほしいと思います。

そのうえに、そうして井伏が浮上させた《故郷》が、現実のそれよりもかなり古色をおびて出現したことも、要注意事項です。たとえば、井伏がそこで人々に使わせた方言は、現実の備後方言をかなり古風にモディファイしたものなのですが、それは、その全体のありようを象徴するものと言つてよいでしょう。そしてこれは、井伏その人の心性の地色でもあつたのです。井伏生家は、農村共同体の只中に位置する代々の地主・旧家で、そこで育つた井伏鱒二は、農村共同体的マインドの代表的所有者でもありました。彼が、些末事を含む物と事とに、生涯、あれだけの強く広い関心を持ちつづけながら、抽象論に対しては、あきれるほど何の関心も示さなかつたことは、その典型

例です。こういう心性は、伝統的、歴史的なものです。私は、井伏の述作は、日本の近代文士のそれよりは、江戸文人のそれに近いという印象をかねてから強く持つていて、それを庄屋文学と言つてみたこともあります。もつとも、井伏家が庄屋を勤めたという記録はありません。

要するに、井伏は、《故郷》の基底に流れるこういう伏流水に根ざすことによつて、近・現代の範疇を超える異色の存在感を示すことになつたと言いつけるわけで、文壇が《ナンセンス文学》などということばでひとまず裏書きしてくれたあの笑いの技法は、それを汲みあげるために必要であつた装置として了解されます。

さて、ここで、宮沢賢治に移りたいと思います。私は、この話の出发点で、《故郷》に深く根ざすことによつて文学的生命を獲得した文学者として、宮沢賢治と井伏鱒二を一くくりにしました。ここでは、それにもう一つのことを加えたいと思います。私はいま、井伏が、独自に開発した諧謔文体によつてなつかしい故郷を浮上させたことを指摘したわけですが、ほぼ同じことが、賢治についても言えると思うのです。

『心象スケッチ 春と修羅』が出現するのは大正十三年ですが、そこには、前例のない、まったく新しい詩法の開発があつたと言つてよろしいでしょうね。「詩集」と呼ぶことに謙虚なためらいがあつて、あえて、「心象スケッチ」という新造語を使つたこと自体が、その獨創性をよく示しています。この心象スケッチの出現と前後して、詩壇では、未来派とか、ダダイズムとか、シュル・レアリズムとかいった前衛詩運動が台頭してくるのですが、内実はそれらとはどういふ関係もありません。

仏教と自然科学と故郷の風土と自然との融合したふしぎな心象世界——。ここでまず注目されるのは、この心象が郷土の自然と自然とに連結して、そのスケッチが日本の山川草木をかつてない豊饒さで立ちあがらせてくれたということです。われわれの文学史は、観察した自然、あるいは、無我没入の対象としての自然を山ほど堆積させていますが、人と自然がまるで対等なことばを交わし合つていふような賢治のこういう自然は、まったく初め

てという印象があります。こういう心情が童話へ進み出るのは最も自然なことです。ここで個人的なことをあえて言いますと、私は、この『心象スケッチ 春と修羅』の諸詩に初めて接した時、それまで自然好きを自任していた自分が恥ずかしくなつて、ほとんど打ちのめされるような気持ちになつた記憶があります。

さらにもう一つ注目されるのは、こういうふう生き生きと自然を立ちあがらせてくれた根本の意識は、『有機交流電燈』などという斬新な比喩でモダナイズされた、古い仏教の認識論を内化させたそれにほかならなかつたということです。アニミズムなどということばを使えば平板になつてしまひますが、とにかく、大正末期というあの時期に、古い仏教的認識論がこういうすごい現実喚起力を持ちえたことには驚かされます。あの自在な〈心象スケッチ〉は、最も古いこの思考様式が生きてよみがえる場として創造されたものと思われまふ。これは、西洋近代の諸観念を追つた日本近・現代文学の主流とは明らかに異なるものです。

ここで、宮沢賢治と井伏鱒二の基本的な共通点を簡単にまとめてみましょう。

- ① 故郷へ降り立った。
- ② 新しい独自の表現・文体を開発した。
- ③ 人々の心の古層に根を下ろした。

こんなふうに言えるでしょうか。しかし、話はそこまでで、だから人と作風が似ているかという、まったくそういうことはありませんね。そして、それがまた、実におもしろいところです。

第一、一口に〈故郷〉といっても、主に郷里の風土・自然と一体化した賢治と、農村・農民の生活に降り立つた鱒二とは、ずいぶんちがいます。ここには、農村に近い町衆の上層部に位置した宮沢家と、農村の只中の上層部に位置した井伏家との立ち位置の違いが反映しているでしょう。賢治にとつて、農村・農民はやはり基本的に他者であり、だから、やがて農村救済の道に踏み出す賢治には、一種の悲壮感がたまたようことになりまふ。これに対し

て鱒二は、自分の内部に降り立つことは、ほとんどそのまま農村社会に降り立つことにほかならず、たとえば、その自然への関心は、農民の、生活中心の自然への関心の延長線を遠く出ることはありません。少年の時から山野の跋涉を生き甲斐とした賢治とは、やはりちがうわけですね。井伏文学をどこまで読みたどつても、自然それ自体への嘆賞や陶醉を読みとめることはむづかしいはずで。

両者の表現技巧、文体の違いについては、もう改めて言うこともないでしょう。似るところはほとんどありません。ただ、一つだけ言うとしたら、賢治の心象スケッチにも童話にも、ユーモアを漂わせるものがありますね。これは、基本のところであつて、心の故郷に帰つた者の一種のくつろぎを土台とするものと言つてよいでしょうか。すると、〈笑い〉をキー・ワードとして賢治と鱒二の違いを追究することが、一つの興味深い道筋になりそうです。もうふれまへん。

第三に私は、「人々の心の古層」ということばをつかいました。しかしこれも、賢治と鱒二とは、仏教と深いところで交叉する意識層、対、生活者（農民）が長い時間のうちに蓄積した慣習や知恵の層というふうな、大きく違つています。二人とも、初期のあのかなり目立つ文体革新の試みから、やがては、その筆を落ち着かせていきます。賢治は、最後には、今日とりあげられる文語詩にまで進むのですが、私には、あの文語体は、彼の心性の地色にかなり近いのではないかという気がしてなりません。対して、著るしい戯画色を落ち着かせた井伏文体については、私はむかしそれを生活者文体と言ひ、いまもそう思つています。戦後に、ある批評家（寺田透）が、井伏鱒二を野に下りた森鷗外だと言つたことがあります。あれはまさに名言だと私は思います。鷗外晩年の史伝文体の難語・稀語を日常語・俗語にひらけば井伏文になる——などと言へばむろん単純に過ぎますが、イメージとしてはそんな感じですね。抽象概念に向かわず、抒情に流されず、どこまでも物と事とに即して進む文章。一口に「古層」などということばを使つても、賢治と鱒二とは、これだけのちがひがあるのです。

以上は、基本的な姿勢として共通性を指摘しうる範疇のなかでの話ですが、

もつと自由に兩人の異同を思い合わせていると、思わず吹き出したくなるほど、異なるところが多く飛び出てきます。もうこれ以上そんなことをいちいち数えたてるとはやめて、象徴的なことを一つだけ言うことにしましょう。

井伏鱒二は、自他共に認める旅行好きで、大量の旅行所見を残しています。のみならず、何度も、江戸期の漂流民に立ち雑じつて大海にただよい、世界各地を遍歴しています。しかし、その井伏も、たとえどんなにさそわれても、《銀河鉄道》にだけは多分、絶対に乗らなかったらうと思います。むしろこれは推測ですが、私は、確信をもつてそう言いたい気持ちがあります。いや、ドリトル先生と共に月にまで行っているじゃないかと反論されるかもしれませんがね。しかし、銀河鉄道の旅と、ドリトル先生の旅とは、まったく異質のもので、どういふふうに言ったらいいか、井伏には、賢治のようないわば垂直志向が認められないのです。彼はやはり、基本的に水平志向の人であつたと私は思っています。

さて、こんなことを強調すると、結局、賢治と鱒二とは交叉するところはほとんどないのかということになってしまいそうですが、ここで注目されるのが賢治の文語詩です。そこでは、対象が、自然より人、人の営みへとシフトしてきていますね。むしろ、多くの場合、自然も重要な役割を果たしています。主役が、人——人の営みに移ってきています。親疎にこだわらず、実にさまざまな人々が登場しますね。多くは断面が写されるだけですが、人それぞれが内在させている宿命や物語などもおのずから連想されて、なかなかの読みこたえがあります。短い詩一編が社会的なドラマを内包させている、そんな印象のものもあります。単純な抒情詩とはまったくちがいます。

もうこれ以上文語詩の感想をこたえた言うのはよしますが、一つだけ言いたいのは、ここで、賢治の文学領域が鱒二のそれに近づいているということ。鱒二は、中・四国を舞台として、賢治没後も、そこに生きる庶民群像を実に多く描いて、私たちに見せてくれました。賢治が一筆書きでさつとすくいあげた庶民たちと、それとが、どう類似し、どうちがうかといったこと

は、やはり興味ぶかい問題です。私は、賢治と鱒二を比較するというこの思いついたシンポジウムで、賢治がわの材料として文語詩がとりあげられたことに納得し、敬意も表しています。各論に期待したいと思います。

※ 本稿は、宮沢賢治学会福山セミナー・シンポジウム「宮沢賢治の文語詩と井伏鱒二の『在所もの』」における基調講演「宮沢賢治と井伏鱒二の文学」（於平成21年11月21日、福山大学社会連携センター）にもとづく。

※ 本稿は、『論叢宮沢賢治』第九号（中四国宮沢賢治研究会 二〇一〇年十二月）より転載した。